

K I T A 掲 示 板

H26年3月11日付、読売新聞に技術協力部が紹介されました。

鉄ビジネス 海外進出

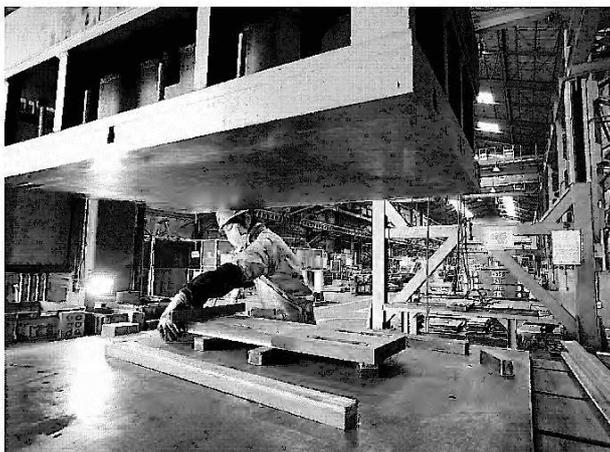
鉄のまち・北九州市の企業が、長年培ってきた技術力を武器に、海外進出を図る動きを強めている。国内鉄鋼メーカーの設備需要が伸び悩む中、新興国などで新たな市場を開拓する狙いからだ。国際的な「鉄ビジネス」の展開を地域経済の浮揚につなげようと、市を中心とした官民一体の取り組みが進む。

(手嶋由梨)

詳論 ふくおか

昨年7月、ロシアのウラル山脈東部に位置する工業都市・ニジニタギル市で、日露合併会社の開所式が開かれた。モスクワの日本大使館の公使や州副知事らが出席。現地メディアも取材に訪れるなど、注目度の高さがうかがえた。プロジェクトを仕掛けたのは、創業100年近い北九州市八幡東区の「三島光産」。溶けた鉄を流し込んで成型する「鋳型」の製造を手がけており、現地の製鉄エンジニアリング会社とロシアで初の海外生産に乗り出した。

北九州 官民一体で売り込み



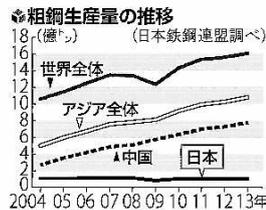
金属加工などの技術をいかし、日露合併会社を設立した「三島光産」

高い技術力 契約相次ぐ

から製鉄業が盛ん。だが、訪れてみると製鉄所の設備は古く、技術面でも遅れていた。三島光産は、溶けた鉄を繰り返し流し込んで材料が変化する「鋳型」の製造を手がけており、現地の製鉄エンジニアリング会社とロシアで初の海外生産に乗り出した。

5年がかりの交渉を経て、

国内需要低迷 新興国に好機



国内の鋼材需要は低迷が続く。日本鉄鋼連盟の統計によると、この10年間の粗鋼生産量は世界全体で2倍超、高成長が続く中国では3倍近くに達する一方、日本は2008年秋のリーマン・ショック後の落ち込みもあってほぼ横ばいの状態だ。中国や韓国メーカーの増産

に特殊な加工を施す技術を現地の商談会でアピール。その優れた耐久性に、現地の合弁相手が強い関心を示したという。海外展開を単独で進めることが難しい地方の企業にとって、行政などの支援も欠かせない。05年からロシアへのビジネス訪問団を派遣し、現地で技術力をPRする場を設けてきた北九州市の取り組みでは、三島光産など複数企業で商談が進んだ。このため、12・13年度は力づけ、14年度はトルタイでも実施。14年度はトルコへの派遣を計画している。

新日鉄住金などの企業OBでつくる「北九州国際技術協力協会」も後押しする。豊富な情報網やノウハウを生かし、各国で設備更新の遅れている製鉄所などを探して北九州市内の企業を紹介している。同協会の工藤和也副理事長は「北九州には金属加工や部品製造、設備管理など『すき間技術』の蓄積がある。これを組み合わせて提案することで魅力が高まる」と指摘。現地企業との商談では、日本貿易振興機構(JETRO)などもバックアップ体制を取っている。

一連の取り組みを通じ、これまで部品製造の技術供与や鉄鋼関連設備の輸出などで、約10社が海外との契約を結び、提携を交渉中の企業もあるという。市国際ビジネス振興課は「北九州の鉄鋼関連技術はどの国でも評価が高い。我々が目利き役や調整役となってチャンスを広げていきたい」としている。

中国やインドなど高成長が続く新興国では、国営やアジア企業を中心に競争が激しい。パートナーとなる現地企業を見つけ、ビジネス習慣の違いをどう乗り越えるかが力になる。進出先の政局不安など、リスクを見極める判断力も問われそうだ。

この記事・写真等は、読売新聞社の許諾を得て転載しております。

当記事は、無断で複製、送信、出版、翻訳、当の著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

読売新聞の著作物については、次のURLで確認できます。http://www.yomiuri.co.jp/policy/copyright/